

〔総説〕

被虐待児（者）の経験の意味を知ることの重要性とその方法

金谷光子*

IMPORTANCE OF KNOWING THE MEANING OF ABUSE'S EXPERIENCE

Mitsuko KANAYA *

キーワード：児童虐待、しつけ、経験の意味

Key words : child abuse, discipline at home, meaning of experience

I. はじめに

近年、児童への虐待が子どもの非行や人格成長に深刻な影響を与えるという（村瀬，2001）報告がされるようになった。諸外国では、被虐待と成長後の発病を関連付ける論文報告（Cicchetti & Toth，1995；Yehuda, 2001；Putnam, 2006）、虐待とPTSDを関連付ける研究（Herman, 1998；Briere, 1996）、また多重人格の有病率が児童の非人道処遇の発生率と密接に関連（Putnam, 2006）しているという研究結果が報告されている。さらに被虐待児の心性として怒りと敵意、攻撃性としがみつ、孤独や空虚感、自己評価の低さ等を持ち、その結果、反社会的・破壊的行動や同一性感覚の破壊、心的外傷および引きこもり等が見られる（Boston 他，2006）。

同様に、日本においても児童期の虐待によるこころの傷が、成人後に精神疾患や生きづらさをもたらす（斎藤，2001；西澤，1994）という報告や、身体的虐待による子どもの脳への器質的なダメージが、子どもの成長に著しい影響を与えること、また、虐待による精神的なストレスによっても子どもの脳は大きな影響を受けるということが明らかになってきた（友田・Martin 監修，2006）。

しかしながら、上記の研究はいずれも医学的、病理学的な視点からの研究であり、実際に虐待を受けるといことが、被虐待児（者）にとってどのような経験と意味をもたらすのか、また、生きづらさや心の病が、被虐待児（者）の持つ経験知とどのように関わっているのかというメカニズムについては明らかにされてい

ない。これら経験の意味や経験知は、被虐待児（者）のこころの傷や対人関係の在り方、そして回復に大きく関わっていると筆者は考える。

大塚（2009）は、施設で暮らす被虐待児たちとの関わりを通して“他者とともに生きる”ことの危うさを中心に現象学的な視点で研究を行い、また、遠藤（2009）は、自立援助ホームの養育者の働きかけと、そこに入所している被虐待児の思春期における意識の在り方の研究を行っている。この二つの研究は本研究を進める上で大変興味深い。

しかし、その対象は前思春期から思春期の子どもたちであり、それぞれの経験を語るには、十分な言葉と表現力、またそれぞれの経験の意味について内省する力を獲得しているとはいえない。その意味において、被虐待児にとって、トラウマの全ての影響が出揃うのは大人になってからではないかという Yehuda（2001）の研究結果は、被虐待児（者）たちの経験を知る上で重要である。被虐待児（者）の無意識の中に存在し続ける衝動は、言葉を自由自在に操れる時期になってから、その意味を表面化させる（Yehuda, 2001）。

児童虐待はしつけとの関係が深い。しつけは、その社会の文化や伝統、習慣などのパターンに従って行われるものであり、しつけは養育者の態度と経験を通して子どもの人格の中に埋め込まれる。このように、しつけは養育者の主観と子どもの主観との間で共有されていくものであるが故に、被虐待児（者）の経験がどのようなものであるかについて理解するためには、被虐待児（者）と養育者との関係性を吟味すると同時に、両者が生きた時代的・社会的・経済的・文化的背景を

*東京女子医科大学大学院看護学研究科博士後期課程（Tokyo Women's Medical University, Graduate School of Nursing）

十分に知ることが必要となる。

そこで本論文では、被虐待児（者）の経験の位相に大きく関与すると思われる時代に応じた子ども観の変遷と児童虐待の関係、また法律から見た児童と養育者との関係性、さらに、しつけや虐待に深くかかわることになる母親に対する世間の見方等について概観しながら、被虐待者（児）の経験の意味を知ることの重要性とその手立てについて探る。

Ⅱ．時代に応じた“子ども”観の 歴史的変遷と児童虐待

狩猟採集時代は、ある一定以上に人口が増えると飢餓に繋がる。それ故にこの時代は母神に多産を祈願する信仰はなく、むしろ母神の魔力を避妊の呪いに利用されてきた。日本においては、縄文遺跡から出土した女性土偶はすべて壊され、また、ユーラシア大陸で出土するヴィーナス像も半分くらいは壊れていた（市川，1993）といわれる。他方で、農耕牧畜社会では多産が望まれたが、いずれにせよ避妊法を知らない時代に行われた人口制限の常套手段は、西欧・東洋を問わず嬰兒殺しであった（市川，1993）。

古代ギリシャ以降、子どもの生死はほぼ父親の裁量にまかされていた。つまり、儀式によって生きる権利を与えられるまでは乳児には何の権利もなかった（Helfer, Kempe, Krugman, 2003）。キリスト教の伝来と共に、乳幼児の遺棄・売買・殺害を防ぐのは国家の義務であるという考えが浸透しはじめ、子どもの遺棄に対して教会が介入をはじめた。13世紀頃より、修道院によって避難所や捨て子の為の家が作られていった（Corby, 2002）。

しかしながら、避難所での病気による死亡率は、避難所が設立される以前の遺棄の慣例による死亡率よりも高かった（Corby, 2002）。

そもそも“こども”という概念は、ヨーロッパにおいて社会構造の安定する16～17世紀にようやく、その存在が認められていった（Aries, 1980）。大人や青年期の者からも区別される子ども時代特有の性質を持つ者、すなわち“子ども”は、今日の我々が理解する仕方では大人から区別され（Corby, 2002）ていった。子どもはしつけの対象として認識され始めると、子どもへの体罰が激しくなり、親に従順でないものは王子であろうと農民であろうと死なない程度に体罰を与えられた（Helfer, Kempe, Krugman, 2003）。特にしつけと関係が深いトイレトレーニングは、かなり幼いころよ

り始められ、しかも懲罰的であり、きわめて侵襲的であった（Helfer, Kempe, Krugman, 2003）。

19世紀になり、経済的安定に応じて家族が安定し（Corby, 2002）、子どもたちは家族の中で欠かせない一員として位置を得ると同時に、重要な働き手として認識されてゆく。

他方、日本においては古代から奈良時代の『古事記』には、子殺しの話はわずかにしかなく、『日本書記』には、敗戦に伴う子殺しがかかれていた（稲村，1978）が、上（1998）によれば、いわゆる“子ども”という存在についての記述は、上記の2冊に殆ど皆無であった。華やかな貴族社会であった平安時代、天変地異や疫病・飢餓などによって、多くの庶民たちは惨めな生活を送っていた。『方丈記』や『今昔物語』には子どもの遺棄についての記述が多い（稲村，1978）。

鎌倉・室町は貴族社会から武士社会への移り変わりであり、平家物語や太平記には敗戦に伴う子殺しが描かれている（稲村，1978）。江戸時代は、武士の義理のための子殺しやあだ討ちが特徴的である（稲村，1978）。上記の説明からも、いかに子どもたちが、その時々

の社会情勢に翻弄されてきたかが理解できる。民衆レベルでみると、明治以前のように多産多死であった時期、日本において子どもは神様からの授かりものという考えが主流であった（伊藤，2011）。柏木によれば、民俗学は「七歳まではかみのうち」という言葉が流布していたと指摘し、また山上憶良の短歌のように日本において子どもは宝でもあった（柏木，2006）。日本における四季折々の子どもに関する儀式は、まさに子どもの心身の健康を願って行われ、現在でもその多くが継承されている。

しかしながら、日本において明治初期の武士の没落・貧窮、農民たちの経済的逼迫の中、子どもの堕胎や間引き・捨て子・孤児などは増加していった（上，1998）。その混乱に対して政府は、1874年に救済のための規則を制定したが、実際にはその任を担ったのは地方公共団体や民間の人々であった（上，1998）。

20世紀以降は医学の進歩により子どもの死亡率が下がり、また教育の平等化も進んだ。それ故に特に子どもの心身の発達に対する研究によって、子どもたちの将来のあり方までも予測させることが可能になり、子どもに対する社会的投資や政治的な投資の大切さが認知されていく（Helfer, Kempe, Krugman, 2003）。

Ⅲ. 児童虐待と法的整備

1. 児童虐待とは

児童虐待とは、身体的・心理的・性的・育児放棄の4つに分けられ保護者が監護する児童に対し、身体に外傷が生じる（又は生じえる）暴行をくわえたり、わいせつな行為をしたり（またはさせたり）、保護者としての監護を著しく怠ったり、著しい心理的外傷を加えることをいう（児童虐待防止法第2条）。

児童虐待を語源的な視点から見ると、児童虐待とは、もともと日本の言葉ではなく、「child abuse」という英語の訳から発生している。しかし、日本語である「虐待」という言葉は暴力的な意味合いが強く、このため abuse という言葉が本来持っていた「乱用」や「誤用」といった意味合いが失われていく恐れがある（斉藤，1992）。「離れる・遠くへ」という意味を持つ接頭語 ab と適切な扱いをする use との合成である abuse は、適切な扱いから離れる，すなわち適切に扱えないということになる。これを子どもに対する abuse と置き換えてみると、「子どもを適切扱えない」という意味となり、養育者と子どもの役割逆転 role reversal を意味する（Helfer, Kempe, Krugman, 2003）。

一方、アメリカにおいて親の権威は絶対的なものではなく、かつ親が子どもの最良の審判者であるとは限らないという立場に立ち、maltreatment、「親の権力の誤用」という概念を用いている（Myers, 2008）。それ故に、専門家も公的機関も子どもの利益のためには、速やかに家族に介入を行うという立場をとっていくことができる。

2. 児童の人権をとりまく日本の法的なあり方

2004年、栃木県で幼い二人の兄弟が父の同居人によって殺された。本事件がマスコミ等で明らかにされるに従い、兄弟の状況は極めて劣悪であったこと、児童相談所の職員や警察が頻繁に対応していた最中に発生したものであるということが解ってきた。情報が顕わになるに従い、“専門家は一体何をしていただろうか”という疑問を人々の中に抱かせた。

2002年、イギリスにおいても、少女が同居していた叔母と内縁の夫によって虐待死させられた事件があった。本事件に対してイギリスでは、事例に関わっていたソーシャルワーカーに、専門家としてすべきことを果たしていなかったとして実刑を課した。（大嶋，2007）。

現在、日本では、児童虐待に対して刑法・民法・児

童福祉法によって対応することができる。身体的虐待には暴行罪や傷害罪を、またネグレクトであれば保護責任遺棄罪を、さらに、暴力を行った親からの分離を行い、子どもを保護する。また、民法においては親権の剥奪（親権喪失宣告：民法第834条）がある。これは児童虐待という行為が、自身の子どもに対する親の養育の権利を剥奪するに値するものであるという意味を持つ厳しい内容でもある。3つ目の児童福祉法は、児童の処遇に対するものである。

しかしながら、日本における児童虐待に関する法律が、親または親に変わる保護者が行う虐待の内容に言及しているのに対して、諸外国（イギリス・アメリカ・ドイツ）においては子どもの存在そのものの権利を保証している点が特徴的である（吉田編，2003）。また、日本の場合、体罰にも寛容な国民感情があり（川崎，1999：古橋編，2007）、未だに懲戒権（2011年6月一部改正）が存在するなど、子どもは親の所有物という意味合いが強い。

Ⅳ. しつけと児童虐待

1. しつけと虐待

しつけは日常的に行われるものである。かつ、その行為はきわめて個人的なものであるため、虐待との違いが見えにくい。しつけとは、本来、しつけ手の個別的・恣意的な意図や動機によって行われるものではなく、その社会の文化や伝統、習慣などのパターンに従って行われるものであり、一般に育児様式 child-rearing pattern（柴野，1989）と呼ばれる。柴野によれば、ガーディナーは、「子どもを処遇するための文化的に設定された、その社会に普遍的な手続き」を一時的制度 primary institution とし、「この養育訓練は、両親の態度と経験を通して子どものパーソナリティの中に基本的座標（エゴ）を形成する」（柴野，1989）と述べている。この意味において、しつけは、「間主観性の世界を作り出す契機であり、しつけは共有された間主観的枠組みに依拠して行われるもの（柴野，1989）」である。

たとえば、トイレトレーニングであるが、子どもは排泄の欲求があるときに場所を選ばず排泄を行うのではなく、便器にすることを養育者から学ぶ。これらの訓練が重要であるのは、排泄はトイレで行うということが、私たちの「文化」だからである（滝川，1994）。

しかしながら、養育者にとって子どもへのしつけは自明のものであり、未熟な親であればあるほど、役割

を全うしようとするあまり、虐待の方へと大きく振り子が動くこともあり得る。また、親になるということは、「子どもという侵入者によって役割システムが変化しライフサイクル上の位置 positional career が推移することでもある」（柴野，1989）。それゆえに、親が今までに培ってきた知識や・技能・性向だけに頼っている子どもに対応することは困難であり、親は子どもの要請に応じて親役割を変容させていかなければならない。その意味で、しつけが行き過ぎる背景には、虐待を行う親の子どもに対応する能力の低さも関係してくるであろう。

2. 養育を担う母の置かれている状況

子どもが世界へと生まれ出ずるとは、世界に初めて迎え入れられること、ひいては世界の一員となっていくことである（森，2007）。また母とは、生まれたばかりの子どもが世界で始めて出会う人であり、無条件に子どもを守り、命の糧を与えてくれる人である。それ故に母親は誰にとっても「生きることの意味」の源泉であり、純粋に「善」でもある（矢吹，1993）。

しかしながら、母親は子どもを愛しむと同時に、子どもの生殺与奪の力も持っている。池田は、日本において、墮胎や間引きは公然と行われていたこと、また、この世に生を受けたとしても、わが国の敗戦後に見られたように街路や公園や駅には極度に栄養失調の子どもたちがうち捨てられていたと述べている（池田，1987）。すなわち、「どのような母親でも、極限状態に置かれれば、生存本能や性本能が母性に打ち勝って、生みの母親であっても子どもを犠牲にせざるを得ない」という面を母は持つ（池田，1987）。

また、大日向（1999）は、社会の「母性幻想」によって子育ての負担に押しつぶされ、育児に苦しむ母親たちはすでに1970年代に存在していたことを指摘している。しかし、「母親の愛」ということになると、多くの者が母なるものに闇を見ることなどを避け、光の当たる肯定的な面しか見ないという傾向がある（大日向，2000）。まるで母なる神話があたかも現実にあるかのように信じ込まされているが、むしろ母性愛への賛美が虐待や事件を発生させる素地の一つではないか、と大日向は指摘している。

同様に芹沢（2005）も、「母は暴力と無縁である」という今も根強く人びとをとらえる神話があり、この神話は、しばしば暴力を振るう母を母親一般から切り離してしまうと述べている。たとえば虐待をする母親に対して、男性だけではなく、同じ母親からも「母親で

はなく、鬼だ」などと批判が上がるが、このような母親を非難によって切り離すのではなく、むしろ、“母親は暴力とは無縁である”という神話そのものから解き放たれることが、逆に母親という存在を暴力から解き放つのではないかと述べている。

それでは、日本における母親像とはどのようなものなのであろうか。山村（1987）は、日本人にとっての母はそれ自体で価値的存在として在り、その要素は子どもにとって「甘えられる母」、「支えとしての母」、「動機の中の母」であると述べている。つまり、子どもにとって母は無条件に受けとめてくれる者であり、甘えられる存在である。また子どもにとって母は、相互依存的存在としてではあるが、子どもにとって「支えとしての母」でもある。さらに、子どもがそれぞれの人生において行う様々な活動や努力は、単に社会的必要性や個人的な欲求だけではなく、直接間接に母を喜ばせたい、母に見てもらいたい、母のためにという気持ちが根底にある。すなわちそれぞれの子どもにとって人生の目的を決定するときや職業選択、なにかを成し遂げたいという行動において、母は「動機の中の母」として在る。

しかしながら、母が子どもにとって心理的機動力であるという時、上記の「支えとしての母」の中には、「かりたてる母」や「禁欲的母」も含まれるがゆえに、母は子どもにとって「支え」や「絆」であると同時に、「束縛」、つまり両価的存在でもある（山村，1987）。

V. 被虐待者の経験の意味を知るための手立てと課題

子どもは、常に所属する社会の政治的背景や情勢、文化や慣習によって規定され翻弄されてきた。現代のように社会が安定し、十分な糧が与えられ、万遍なく教育が行われるような社会的状況にあって初めて、子どもの存在が大切なものとして認識され重要視されるようになっていった。

現代における児童の権利の擁護は、内田（2008）が指摘するように、しつけの基準が高まり暴力や放置がおこなわれなくなってきた安全な今日においてこそ、子どもへの暴力・放置が危険なものとして顕在化してきたともいえる。その意味において児童虐待を子どもへの人権侵害として扱うことや、児童虐待が子どもの心の成長を妨げる等の心理学的視座は、きわめて現代的な子ども解釈によって提起されたもの（内田，2008）であるともいえる。

このような子どもの人権意識への高まりは、同時に養育の在り方に対する世間の目も厳しいものとなっていく。

すでに見てきたように、しつけを逸脱した暴力は子どもたちに心身のリスクを負わせる。それにもかかわらず、児童虐待で警察に連行された親たちは「あれは、しつけであった」と述べることが多い。それでは、子どもにとって存在の基盤となる養育者、とりわけ母からの暴力は、子どもたちにどのような経験の意味を齎すのであろうか。母からの暴力は、幼い子ども自身の存在の基盤奪い、意味を失わせ、自身の価値を貶め、時にはあまりにも受け入れがたいために、その時々記憶を忘れるという方法でその場を凌ぐ。Vでは、このような被虐待児（者）たちの中に埋め込まれている経験がどのようなものであるのかについて語ってもらうことの重要性を考える。

1. 児童虐待における“Sleeper 効果”と経験を語ること

子どもへの暴力は、結果として自己の欲求そのものを否定し、自己の欲求はないものとして、あるいはそのような欲求を持つ自分が悪いのだというように、身体とところを分離させ、自己の身体化が出来ない状況の中で生きらざるを得ない。そして、それらの不安を回避するために排除された欲求や衝動は、消えることなく無意識の中に存在し続ける (Freud, 1971)。

前述したように、幼いころの心の傷に対する心理的反応の現れは、認識の発達と成熟を必要とされ、その間、それぞれの心理的反応は子どもたちの中で眠っていると考えられる (Yehuda, 2001)。

このような「sleeper」効果といわれる現象は、“幼いころから虐待を受けるという経験”の苦しみから、子どもたちの心を守るための作用ともいえる。しかし、被虐待児（者）が自身の持つ経験や感情について言語化することは、それまでコントロールできなかった感情等を初めて自分の意志の支配下に置くことができるといわれる (斉藤, 2001; Merleau Ponty, 1967)。すなわち、話すことによって過去の出来事が自分の歴史に再編され、秩序立っていくという可能性を秘めている (斉藤, 2001; Merleau Ponty, 1967)。このような契機を経て、人は自身の経験を表現し、被虐待経験の意味について考え、知ることが出来るのではないかと思われる。

2. 被虐待児（者）を理解するための一つの方法

—被虐待者が解釈している仕方を知ること—

被虐待児（者）は、その養育状況から、自分の存在の基盤や生きることを意味を喪失していることが多い (金谷、尾曾, 2004)。

筆者がインタビューをした被虐待者Aは、27歳の時に「あなたは悪くない」とカウンセラーに言われた途端に、周りの景色がいきなり「総天然色に見えた」と語っていた。Aの被虐待経験は、Aの感覚とAを包む外界とを同時に失っていた。

Benner (Benner & Wrubel, 1989) は、苦しみから連想されるもっとも多い言葉は「意味喪失」に関わるものであり、一方でストレスの場合は、「人がふだん生きていく上で 携え依拠している意味が失われてしまうこと」であると述べている。Aは生まれながらのネグレクトによって、「私なんか消えてしまえばいい」「いなくてもいい」と表現するように、自己の存在の基盤や生きることを意味を失っていた。また母親の際限なく変化する要求に応じて生きなければならなかったAは、現在もお生きづらさを感じている。たとえば幼稚園の母親たちと一緒にいる時に、「自分が立つ場所」、「座る場所」さえ決めることが出来ず、「笑うべきときはどこなのかさえわからない」と述べていた。

被虐待者の経験の意味を知ろうとする時に重要なことは、それぞれの被虐待児（者）たちが、この世界とどのように関係結び、またそれぞれの対象者と作り出す状況を、どのように解釈してきたのかということを知ることであろう。すなわち、その人が何に関心を持ち、何を大切に思っているのか、何に繋がっているのか、つまり「何に氣遣って生きているのか」「その人が意味深く方向付けられているものは何か」というように、その人が世界とどのように関わってきたのかという、被虐待者の根源的な在り方を見据えることが重要であろう。

なぜなら、私たちは生まれながらに、ものや他の人に配慮しながら、その状況を解釈し意味づけを行う存在である (Heidegger, 1962; Benner, 1999) が故に、その人が、どのようにその「状況」に根ざしているのかに関する理解は、他者理解の基盤となろう。

最後に、同じ言語的文化の基底に存在する人々にとって、あまりにも当たり前すぎて意識をしていない「共通する意味」について知ること (Benner, 2006)、まさに Heidegger (1962) のいう日常の当たり前の生活の中にこそ、人間の真の在りようが埋め込まれていることを探求することに他ならない。

以上のことから、被虐待者の経験に耳を傾け、その意味を解釈するという研究は、被虐待者の生きづらさや心の病との関係を明らかにするうえで重要である。これらの研究結果が、ひいては児童虐待の予防や被虐待児（者）のこころの回復に寄与する手立ての一つであると考ええる。

Ⅵ. おわりに

子どもへの暴力は、人間が誕生した時代から連綿と続いてきた。しかしながら、とりわけ一人で生きることが十分ではない子どもにとって、大人からの保護は子どもの心身の健康に重要な意味をもたらす。さらに、社会の在り方にも大きく影響を及ぼす児童虐待に対しては、粘り強い取り組みが望まれる。

Ⅶ. 謝 辞

本研究を進めるに当たり協力をしてくださった皆様、また、本論文をまとめるに当たりご助言をいただきました東京女子医科大学看護学部、田中美恵子教授に心より感謝申し上げます。

引用文献

- Aries, P. (1960)／杉山光信、杉山恵美子訳 (1981): 子供の誕生, みすず書房, 東京.
- Benner, P. & Wrubel, J. (1989)／難波卓志訳 (1999): 現象学的人間論と看護, 1-30, 医学書院, 東京.
- Benner, P. (1994)／相良ローゼマイヤーみはる監訳, 田中美恵子・丹木博一訳 (2006): 解釈的現象学, 医歯薬出版, 東京.
- Boston, M. & Szur, R. (1983)／平井正三、鶴飼奈津子、西村富士子訳 (2006): 被虐待児の精神分析的心理療法, 金剛出版, 東京.
- Briere, J. (1996): Trauma Symptom Checklist for children (TSCC): professional manual. Psychological Assessment Resource より引用.
- Burns, N. & Groves, S. K. (1993): The Practice of Nursing Research, W B Saunders Company, 61, 64-66.
- Cicchetti, D. & Toth, S. L. (1955): A Developmental Psychopathology Perspective on Child Abuse and Neglect. J AM Child Adolescent Psychiatry, 34:5.
- Corby, B. (2000)／萩原重夫 (2002): 子ども虐待の歴史と理論, 明石書店, 51-52, 42, 東京.
- 遠藤野ゆかり (2009): 虐待された子どもたちの自立－現象学からみた思春期の意志義, 東京大学出版会, 東京.
- Freud, S. (1920)／懸田克躬, 高橋義孝訳 (1971): 精神分析入門, 295-310, 人文書院, 東京.
- 古橋エツ子編 (2007): 家族の変容と暴力の国際比較, 明石書店, 東京.
- Heidegger, M. (1962) / translated by Macquarrie, J. & Robinson, E. (2008): Being and Time, Harper Collins.
- Helfer, M. E, Krugman, R. D., Kempe, R. S. (1968)／社会福祉法人子どもの虐待防止センター監修, 坂井聖二監訳 (2003): 虐待された子ども, 26-38, 明石書店, 東京.
- Herman, J H (1992)／中井久夫訳 (1998): 心的外傷と回復, みすず書房, 東京.
- 市川重孝 (1993): 母権と父権の文化史, 人間選書 166, 13-15, 東京.
- 池田由子 (1987): 児童虐待, 中公新書, 124-127.
- 稲村博 (1978): 子殺し その精神病理, 誠信書房, 103-115, 15-122, 2-139, 東京.
- 伊藤奈津子 (2011): 日本昔話に読む子どもの「いのち」, 仏教看護・ビハーラ学会, 6:137-166.
- 上笙一郎 (1998): 児童研究のために, 12-22, 272, 久山社, 東京.
- 柏木恵子 (2006): 子どもという価値, 中公新書, 15-16, 東京.
- 金谷光子, 尾曾直美 (2004): 「語り」による「他者理解」, 日本医学哲学・倫理学会, 22:93-102.
- 川崎二三彦 (1999): 児童虐待－子どものためのソーシャルワーク I, 82-98, 岩波書店, 東京.
- Myers, J. E. B, Berliner, L., Briere, J. (2002)／小木曾宏監修 (2008): マルトリートメント, 6, 明石書店, 東京.
- Merleau-Ponty, M. (1945)／竹内芳郎, 小木貞孝訳 (1967): 知覚の現象学 I, 292, みすず書房, 東京.
- 村瀬嘉代子 (2001): 児童虐待への臨床心理学的援助, 臨床心理学, 1 (6): 712.
- 森一郎 (2007): 子どもと世界－アレントと教育の問題－, 哲学雑誌, 122 (794): 92-112, 有斐閣, 東京.
- 西澤哲 (1994): 子どもの虐待－子どもと家族への治療的アプローチ, 5, 73, 90-118, 誠信書房, 東京.
- 大塚類 (2009): 施設で暮らす子どもたちの成長, 東京出版会, 東京.
- 大日向雅美 (2000): 母性神話の罫, 日本評論社, 東京.

- 大日向雅美 (1999): 子育てと出会うとき, NHK ブックス, 91-92, 東京.
- 大嶋伸雄, 高屋敷明由美, 藤井博之 (2007): 英国における保健医療福祉専門連携教育 (IPE) の発展と現状, リハビリテーション連携科学, 8:16-26.
- Patnum, F. W. (1997) / 中井久夫訳 (2006): 解離, 11, 第5版, みすず書房, 東京.
- 斉藤学 (2001): 家族の闇をさぐる, 72-120, 287, 小学館, 東京.
- 柴野昌山編 (1989): しつけの社会学, 4-6, 11-12, 世界思想社, 東京.
- 芹沢俊介 (2005): 母という暴力, 14-15, 春秋社, 東京.
- 滝川一廣 (1994): 家庭の中の子どもと学校の中の子ども, 40-45, 45-49, 35-39, 37-39, 岩波書店, 東京.
- Teicher, M. T. ed. (2006) / 友田明美 (2011): いやされない傷, 10-36, 53-77, 診断と治療社.
- 内田良 (2008): 児童虐待への現代的まなざしー暴力はいかなる意味において問題なのかー, 愛知教育大学実践総合センター紀要, 11:263-269.
- 矢吹省治 (1993): グリムはこころの診察室, 38, 平凡社, 東京.
- 山村賢明 (1987): 日本人と母ー文化としての母の観念についての研究, 209-235, 東洋館出版社, 東京.
- Yehuda, R., Sperus, I.L., Golier, J.A. (2001): PTSD in Children and Adolescents, American Psychiatric Press, 118-158.
- 吉田恒雄編, 吉田恒雄, 松原康雄, 磯谷文明他 (2003): 児童虐待防止法制度ー改正の課題と方向, 向学社, 東京.